

雜 錄

エラスムスの生涯

——四百年忌に際して——

エラスムスの生涯と思想並にその歴史的地位は、近時夥しい研究の發表や書簡集の刊行にも拘らず、未だ確定的な判断を下されてゐない。特に彼の生誕と幼年時代に就ては、信憑すべき資料が缺けてゐる。彼は一四六六年(或は六五年)十月二十七—八日夜・ロッテルダムの(牧師)ロゲリウス・ゲラルドゥスの(庶)子として、同地(或は近在ガウダ)に生れたといはれる。彼の洗禮名はヘラスムスであつたが、後年希臘語を知るに及んで、エラスモス(愛されるもの)に由來すると考へてそれに同化し、且つその羅甸譯デシデリウスを冠した。尙ほ彼の著作にはエラスムス・ロテロダムス(或はロッテルダムメンシス)と記されてゐる。彼は一四七五年九歳にしてデヴェンテルなる、かの有名な「共同生活の兄弟」によつて設立された聖ルバン寺院附屬の學校に入つた。この教團は和蘭の修道院說教者(ヘルト・フローテ)(ゲラルドゥス・マグヌス)によつて創設され、彼の死後アロレンテイウス・ラデヴィンによつて組織化された「敬虔と愛」に生きるものの團體であつたが、青少年の教育を以てその主要任務と考へ各地に學校を興したのである。當時人文主義の運動は既に和蘭にも及び、教育の理想と方法に一大變革を來しつゝあつたが、

共同生活の兄弟はこの新思潮を逸早く採入れて、人文主義的教養をその中心的使命とした。エラスムスはこの學園にあつて、(或は直接に或は間接に)校長アレクサンデル・ヘギウスとその補佐者ヨハネス・シンテイウス等から、彼の一生を動かした古典に對する愛を育まれた。尤も、彼等の人文主義は古典を唯一の教育目的と考へる偏狭なものではなく、それと宗教的・道德的訓練との融合調和こそ彼等の關心の中心であつた。この學園の宗教的態度は、前にトーマス・ア・ケンピス、ニコラウス・クサヌスを出したことから推察されるやうに、實踐的、神祕的を以て特性づけられ、神學や外的祭式に拘らず、敬虔な内的生活と基督への直接的歸依を以て根本とした。しかしこのやうに教養よりは生活を、外的形式よりは内的精神を重じたにも拘らず、その信仰はあくまで正統的であり、教會に忠順であつた。エラスムスの後年に於ける羅馬教會と改革者達に對する態度、並に彼の人文主義の特異性を理解するためには、その中に彼が生育した學園の宗教的雰圍氣を考へなければならぬ。

一四八四年、エラスムスは相次いで父母を失つた後、後見者達によつて兄ペーテルと共に(ヘルツォゲンブッシュ)の修道院附屬學校に送られた。大學に進んで古典の修業を積むことを希望してゐた彼はこの地に二、三年を「過した」といふよりは「失つた」後、又もや自らの意志に反してガウダ附近スタインにあつて同じくアウグスティヌス派に屬する聖グレゴリ修道院に入ることになつた。この僧院生活は、彼が後に一生の最大の不幸と歎い

てゐるやうに、彼の人文主義的教養の理想なる自由な精神的發展と處生とを妨げ、又多くの性格上の弱點を植ゑつけたが、しかし他方教會的生活を體驗することによつて、その緊急の諸要求と諸問題とを看破して、彼の一生の課題「人文主義を以て教會改革に資する」基礎を置いた。「信仰に乏しく、教養に缺けた」僧院に於て、彼は日夜精勵して、古典と教父の著作に親しみ、終に九二年四月二十五日聖職を授けられた。

彼は聖職に就きながら、あくまで僧院生活に満足出来なかつたが、やがてその學識はカンブレの司教ハインリヒ・フォン・ペルゲンの知るところとなり、九四年司教の許に赴くことを許された。元來は司教の伊太利旅行に隨伴する筈であつたが、この希望は實現されず、漸く司教から僅かな學資の補給を得て巴里に赴き、九五年八月モンテ・ギユのコレギウム・ドムス・パウベルムに入つた。この地のスコラ學は勿論彼の要求を充すものではなく、又營養不良と過勞のため病を得て歸國の巴むなきに至つたこともあつたが、終に九八年の秋には神學のバツカラウレウスの資格を得た。やがてモンテ・ギユを去つて、英國出の少年達の教授に當つて學資を得てゐる中に、その一人キリアム・ブラント(後にマウントジョイ男)と識り、その勧めによつて一九九九年春英國に渡ることとなつた。

この英國の生活も安定を缺くものであつたが、同年秋オクスフォードでジョン・コレトやトマス・モリア等と交ることを得た。殊に「羅馬人への書」を講じてゐた神學教授コレトからは、彼の學問的努力にとつて決定的な影響を受けた。神學の目的は基

督教の原始的精神的恢復とその眞理性の直接的把握にある、従つてその中心は當然スコラ學ではなくして、聖書の研究が占めるべきであるといふことを教へられ、尙ほ當時閑却されてゐた希臘語研究の必要をも感得したのである。

かくして一五〇〇年一月巴里に歸來後、エラスムスは希臘語の研究に専念して、教父の著作(特にヒエロニムス)やパウロの書翰に親しんだ。そして彼の著作的活動はこの時代に始まるのである。先づ同年六月には、「古語集成」(Collocutanea Adagiorum)がマウントジョイ卿に捧げられ、次いで〇二年には、有名な「基督教戰士教範」(Tractation Militis Christiani)が現れてゐる。この書は、彼自らコレトへの書簡に於ていふやうに、眞の敬虔を忘れ、宗教の本質を外的祭式の中に認める教會人の誤謬を訂正せんとするものである。この主張は、彼の殆んど總ての著作に見られるものであるが、この書では特に力點が置かれ、敬虔的ではなく、迷信的であり、基督の名を除いては、異教徒の迷信と五十歩百歩である多くの基督者達の迷蒙を批難してゐる。外的祭式は内的敬虔への手段であつて、それを本質的のものとして考へ、それに全く頼ることは破滅の基である。眞の敬虔は基督に従ふことであり、この「アルケテュニス」から少しでも離れることは墮落である。この「教範」は最初はあまり注意を惹かなかつたが、やがて多くの版を重ねた。勿論修道僧やスコラの神學者連からは烈しい批難を受けたが、多くの讀者の歡迎と高僧達の支持を得た。蓋し、この書は最も簡單な眞理と最も明白な事實を述べたものに過ぎないが、しかも何人も言表す

るに至らなかつた一般基督教界の切實な要求を剴切に表現したものであつたから。次いで〇五年には、かのラウレンティウス・ウァルラの新約聖書釋義に序文を附して刊行した。エラスムスは、聖書の本文への復讞とその文法的解明とを眞の聖書解釋の基礎的制約と主張し、殆んど同時にロイヒリンが舊約に對しなしたと同一の業績を擧げてゐる。

やがてマウントジョイ卿に招かれて再び英國に渡ることとなつた。今度は前回よりも上首尾であつたが、國王の侍醫パプテイスタ・ボエリオに知られ、その子息二人の監督を委ねられて、伊太利に渡ることを得た。エラスムスは〇六年九月長年憧憬の地なる伊太利の土を踏んだ。この伊太利旅行は僅か三年であつたが、彼を精神的教養と聲望との絶頂に立たせた。先づトリノで神學博士の學位を受け、一年間弟子と共にボロニアにあつた後、ヴェネチア、パドヴァ等に遊び、各地で人文學者達の歡迎を受け、又羅馬では樞機員等によつて厚く遇せられた。この伊太利滞在期の最大の收穫は、かの有名なヴェネチアの出版者、アルドゥス・マヌティウスによる「古諺集」の再刊である。その一五〇〇年版は、彼が殆んど希臘語を解しなかつた頃のもの、僅か八百の古諺を集めて、それに貧弱な説明を附したものに過ぎなかつたが、今度は三千以上をも集め、深遠な學殖を示す剴切な註釋と新鮮な挿話を入れ、名も「古諺數千」(Chilides Adagiorum)と改めて、〇八年刊行された。しかし、伊太利の生活も、エラスムスの期待に背く點が多く、又長らく羅馬に止り、特に法王朝の人々と交ることは、彼の自由な研究と著作的

活動を妨げると感じたのであらう。偶々ヘンリ八世の宮廷に勢力を得てゐたマウントジョイ卿が又もや渡英を勧めたので、エラスムスは〇九年伊太利を去つて、同年秋には倫敦に着いた。

この伊太利よりの歸還を以てエラスムスの生涯の第二期は始まる。それは學藝の歴史に比類を見ない聲望と、穰り豊かな著作的活動に至る時期である。しかし外面的には、自由な研究を妨げる如何なる責任ある地位にも就くことなく、依然二三の庇護者の下にある學者の生活であつた。大陸に旅行したこともあつたが、今度は在英五年先づ「痴愚の頌」(Moriae Encomium)が仕上げられ、次いで一一年以來ケイムブリヂに希臘語を教へつゝ、新約聖書に關する仕事にとりかゝつた。トマス・モリアのバクラーズベリの居宅で一週間の中に書上げたといはれる例の諷刺書は、巡禮、祭式、修道僧、スコラ學者等に對する多くの辛辣な諷刺と揶揄とを含んでゐるが、筆者の態度は當代の宗教状態に深い關心をもつ信仰生活者のそれである。筆者は、懷疑者或は傍觀者ではなく、衷心からその改善を希望する宗教の批判者である。彼は先づ、修道院生活に嚴しい批判を加へ、その禁慾的生活と苦行とによつて神の特別の恩恵が得られるといふ認見を打破すると共に、世俗のたゞ中にある活動的生活も一層基督教教的であり得ると主張してゐる。しかし彼の修道院生活論難は、その原理や理想に對してよりも、修道僧の人物に對して一層痛烈であり、その行狀は完膚なきまでに叩かれてゐる。次に論難の鋭鋒はスコラ學者達に向けられる。エラスムスは彼等の學問の缺陷を一々指摘すると共に、特に彼等が基督の福音を見

失ひ、眞に重要なことがらを犠牲にして取るに足らぬ小事を擴大しつゝあることを批難してゐる。「これらの最も煩瑣なる煩瑣は、學者達の無数の種族によつて益々煩瑣にされつゝある。實在論派、唯名論派、トマス派、アルベルトゥス派、オツカム派、スコトゥス派等々の紛糾を脱するよりは、迷宮から逃れる方が遙かに容易であらう」といふ。

一五一四年エラスムスは英國の生活を見限つて故國ブラバンに歸つたが、やがて在英時代の收穫を上梓しようとして、その精確な印刷と美術的な裝幀によつて知られてゐたパーゼルの出版者ヨ一ハン・フローベンの許に赴いた。今後はパーゼルが彼の活動と關心の中心地であつたが、後の皇帝カール五世の宮中顧問官として、一五一二一年間はブリュセル、ルヴァン等に在住した。

我々は、フロローベン出版のエラスムス著作中、先づ彼の神學的主要業績なる希臘語新約聖書について語らう。これは恐らく彼の第一回英國滞在時代から計畫され、又彼をして希臘語の研究に赴かした所以のもの。幼少時代からの理想なる「人文主義と神學との結合」を實現し、スコラ學の桎梏から解放された純正なる神學を樹立せんとするものである。一五一六年フロローベンから出版された本書 *Novum instrumentum omne, diligenter ab Erasmo Roterodamo recognitum et emendatum* &c. は、希臘本文、羅甸譯、註釋から成り、法王レオ十世への獻辭と、一般的序説として「讀者への勸告」、「方法」、「辨明」を冠してゐる。その希臘本文は批判的刊行本として學術的價值を有するものとはいはれない。エラスムスはパーゼル在の二三の手稿本をとつ

てその一を梓に上し、コレトから送られたもの等と校合したに過ぎない。(尙ほ、一九年、二二年、二七年、三五年と改訂されてはゐるが、本質的相違は見られない) 重要なのは多くの主要點に於てウルガータと相違を示す羅甸譯である。蓋し、それは彼自らが序言に於ていふやうに、教會の聖典ウルガータが信用に値しないセカンド・ハンドのものに過ぎないことを示したからである。この點文學の領域に於ける教會權威の失墜は、まさに十七世紀の天文學的發見による、科學の領域に於けるそれに對比されるべきであらう。尙ほこの羅甸譯も決して學問的には嚴正なものとはいはれないが、彼の意圖は、自らレオ十世への獻詞に於ていふやうに「基督者をして、福音書並に使徒の書から直接に、基督の教を學ばしめる」ことにあつたのである。尙ほエラスムスの新約聖書に關する業績として、一五一七—一五二四年間に黙示録を除く全體の義解が公にされたことを附言しなければならぬ。それらによつて、エラスムスは、問題に解答を與へることは出来なかつたが、問題の所在を示し、それを深く掘り下げて、近代の聖書解釋の基礎を据ゑたのである。

次にこの時代に始まる仕事として、教父の著作の校訂並に翻譯について述べよう。それらにはヒエロニムス(一六六年)、キプリアヌ(二〇年)、ヒラリウス(羅譯二六年)、イレナエウス(同二六年)アンブロシウス(二七年)、アウグスティヌス(二八年)、クリソストムス(羅譯三〇年)、バシリウス(三二年、獨逸に於ける最初の希臘作家の刊行)、オリゲネス(羅譯三六年)等があるが、彼自らその任に當つたものは極めて少數で、甚だしきは、彼

の名を附するに過ぎないものもある。その中特に重要なのは、彼が常にその學識と文才とに感謝し、その神學への貢獻を稱揚して已まなかつたヒエロニムスである。これに反して、アウグスティヌスはその豫定説と道德的能力の否定との故に、全くエラスムスとは氣質的に合はなかつた。

彼は一五二一年來バーゼルに定住してフローベンの「水車小屋」で休みなく「挽く」すること八年に亙つたが、この時代こそ彼の著作的活動の絶頂をなすものであつた。帝王、諸侯、司教からも無数の手紙が送られ、日々四十通の返書を認めねばならなかつた。彼の上に驟雨のやうに降り注ぐ贈物は法王クレメンス七世の下賜金からコロニーユの尼僧達の糖菓にまで及んだ。彼の讀者と嘆賞者とは全歐に亙り「ルターが民衆の愚昧に語つた」の對して、エラスムスは一般教養人の傾聽を得た。一八一二年刊行の「日常對話集」(Familiar Colloquium Opus)は二六年増補され、彼の著書中最も多く讀者を得た。しかしこの「水車小屋のエラスムス」も宗教的動亂に決して無關心ではなかつた。彼は改革の必要を充分に意識してゐたが、それが現在の組織内に於て、徐々に平和に遂行されることを望んだ。彼は改革者達の過激な言動を好まなかつたのみならず、その主張に原理的に反對してゐた。彼の簡素な、倫理的な、非教義的な基督教の理想は、改革者達に於てよりも寧ろカトリク教會内に於て實現されるものと信じた。エラスムスとルターとの根本的な相違は、前者の「自由意志論」(Diathe de libero arbitrio) (一五二四年)に見られる。彼は、人間の功績を總て否定するルター

のアウグスティヌス主義を斥けて救済は神の恩寵と人間の努力との所産であるといふ傳統的カトリクの信仰を支持してゐる。

しかしエラスムスは神の恩寵を決して輕んじたのではない。自由意志を許しつゝ、しかも神的恩寵に信頼することこそ彼の立場であつた。蓋し、ルターの教説は基督者の道德と敬虔とをその根柢から覆すもの、やうに見えたから。彼の「自由意志論」は自ら進んでルターとの立場の相違を示さうと、或は羅馬教會から異端克服の懇請を受けて書かれたものであるといはれる。しかしエラスムスをして筆を執らしめたものは、彼の人文主義とルターのスコーラ學との背反である。自由意志の否定は恐らくアウグスティヌスのもの、又スコーラ的のものであらう。しかし決して新約にも使徒教會にも屬するものでない。彼は希臘神學者、古典學者として書いたのであつて、羅甸神學者、聖職者として書いたのではない。彼は基督教の眞理性がその本源的文書によつて知られることを望み、或る學派の哲學や神學と同一視されることを欲しなかつた。尙ほ、エラスムスの自由意志論に對して、二五年末ルターの「意志不自由論」(De seruo arbitrio)が現れ、更にこれに對してエラスムスは翌年「矯激な戰士」(Hyperastistes)を公にしたが、しかしそのとき決して彼自らのエレメントにあつたのではない。一般に神學的論争は彼の關心の中心を離れること遠く、特にそれが黨派的感情に煽り立てられるときには全く堪へ難いものであつた。

兎角する内に改革運動は終にバーゼルにまで及んだが、それに與し得なかつたエラスムスは、一五二九年舊教地なるブライ

スガウのフライブルクに移つた。最初は數ヶ月滞在の予定であつたこの地に六年も住んだが、その濕氣が彼の健康に適しないのを感じ、故國からの招きに應じて歸國の途上バーゼルに立寄つた。この頃彼の健康は甚だしく衰へはじめ、痛風の惱みは甚だしかつた。一五三五―三六年の冬は、外出することなく多くは病床にあつて過した。しかも彼の著作的活動は休みなく「教會の純粹性」といふ論文を口述し、或は上梓されつゝあつたオリゲネスの校正を見た。三六年六月二十八日、「病み衰へた手で」(ageda manu) 書かれた、彼の最後の書簡には、「今度程病に苦んだことはない。數日間讀書も出来ない」と讀まれる。彼が七十年の長い生涯を終つたのは同年七月十二日である。

エラスムスの風貌はホルバインの描いた多くの肖像畫によつて知られてゐる。彼の「最も優れた觀察者」といはれる全集の編輯者ベアトウス・レナスも、彼が周圍の變化に極めて敏感であつたことを語つてゐるが、エラスムスが時代の宗教的鬭争に對してとつた中正の態度は先づこの點から理解されねばならない。彼は心底はプロテスタントでありながら、カトリクとして享有する世俗の特權に執着して、それを離れ得なかつたといふやうな批評も俗間に行はれてゐる。しかし、彼の著作を通じてエラスムスを親しく知るとき、或る黨派に與するといふことは彼の本性にとつて全く不可能であつたことを知るのである。彼が中立的態度をとつたのは、臆病でも弱氣でもない、彼は自らの本性の要求に従つたのである。彼の知性が黨派の偏狹を超越

したのみならず、彼の全人格はその狂騒と矯激とに堪へなかつたのである。彼が魚を嫌ひ、その香も堪へられなかつたといはれるやうに、僧侶の狂信と腐敗とは彼にとつて全く鼻持ちのならぬものであつた。彼は知識の光明と開明とを妨げる僧侶階級の昏迷に對して、嘲弄と擲論とを限りなく浴せかけた。そしてこの點「エラスムスが卵を生んで、ルターが孵化した」と正當に語られるのであるが、教會を攻撃し或はその現存の組織を破壞することは全く彼の思ひもよらぬことであつた。且つ又、ルターの叛逆によつて生れた新しい狂信、福音主義は尙ほ一層厭ふべきものであつた。「我々が司教や法王を拂ひ退けたのはオットやフリーレルのやうな狂人の鞭に繋れるためであつたか」とメラニヒトンに書いてゐる。彼の傳記者ドゥラモンドがいふやうに、エラスムスは良識と合理的宗教の使徒であつた。元來教義には關心を有せず、たゞ基督教世界一般の同意を有するが故に、羅馬教會を改革者達よりも選んだ。終生彼は自己の生活目的に忠實で、健全な教養と明澄な良識のために、無知と迷信の諸力と戰つた。彼は、形而上學的傾向や神學的主張を有する學者ではなく、總ての事象を理性の眼で觀察する文學者であつた。最後に我々は宗教と制度とに對する立場の根本的相違にも拘らず、尙ほエラスムスが「十六世紀のヴォルテール」と呼ばれることを想起して、この粗略な叙述の筆を擱かう。

(服部英次郎)

コンスタンティン・リッター

テュビンゲン大學名譽教授コンスタンティン・リッターは五月某日逝去。氏は一八五九年四月三日ヴュルテムベルクのルーテスハイムに生れ、九五年エルヴァンゲンのギムムナージウムの教授、一九〇三年テュビンゲンのギムムナージウムの教授を経て、一六年同地の大學教授に進んだ。八八年の「プラトンの研究」に於て、所謂文體統計の方法によつて、プラトンの著作の眞偽と年代順を究明した氏は、後に「プラトンの彼の生涯」著作、教説至三卷によつて現代プラトンの研究の基礎を据ゑた。次に氏のプラトンの研究を擧げて置かう。

Untersuchungen über Plato. Die Echtheit und Chronologie der platonischen Schriften; nebst Anhang: Gedankengang und Grundanschauung von Platos Theätet. Stuttgart: W. Kohlhammer 1888, VIII, 187 S.

Platos Gesetze, Kommentar zum griechischen Text. Lpz.: B. G. Teubner 1896, IX, 416 S.

Platos Gesetze, Darstellung des Inhalts. Lpz.: B. G. Teubner 1896, IX, 162 S.

Platons Dialoge, Inhaltsdarstellungen, I. der Schriften des späteren Alters. Stuttgart: W. Kohlhammer 1903, VI, 220 S.

— — — II. der Schriften des reifen Mannesalters, I. Teil:

Der Staat. Stuttgart: W. Kohlhammer 1909, IV, 216 S.

Neue Untersuchungen über Platon. München: C. H. Beck

1910, VIII, 424 S.

Platon, sein Leben, seine Schriften, seine Lehre. Bd. 1-2.

München: C. H. Beck. 1910, 1923, IX, 588; XV, 910 S.

Platons Dialog Phaidros. Übersetzt, erläutert und mit ausführlichem Register versehen. Lpz.: F. Meiner 1914, 157 S.; 2. Aufl. 1922, 159 S.

Die Kerngedanken der platonischen Philosophie. München:

E. Reinhardt 1931, X, 346 S.

Platonische Liebe, dargestellt durch Übersetzung und Erläuterung des Symposions. 1932.

Platonismus und Christentum. 3 Vorträge. 1934, 74 S.

 學 誌 歐 日

Revue Philosophique de la France et de l'Étranger.

6^{re} Année, 5/6, Mai-juin 1936.

M. Halbwachs, La méthodologie de Fr. Simiand. Un empirisme rationaliste. G. del Vecchio, La crise de la science du droit. A. Rey, Logique, mathématique et participation à la fin du Ve siècle hellénique. E. Labac, La production du présent relativement au cours de la durée. I. Buret, Idéal et réalité.